

「高島北海『写山要訣』の中国受容：傅抱石の翻訳・紹介を中心に」 に関する講演会報告

(2023年3月28日 中国杭州市 中国美术学院)

陳 イジェ
上海大学美术学院講師
2021年度奨学生

1. 講演会開催の経緯

2022年の6月、私のもとに中国杭州の中国美术学院で「高島北海『写山要訣』の中国受容：傅抱石の翻訳・紹介を中心に」をテーマに講演会のお誘いが届きました。2023年3月28日、講演会は中国美术学院の象山キャンパスの近現代美術文献研究センターで行いました。

その経緯を報告します。

講演会に当たり、渥美財団から30万円の助成金をもらい、2022年6月のはじめ、中国に入国しました。日本の皆さんは中国の「隔離」に関心があると思いますのでここで少し紹介します。

当時の中国はまだ厳しいコロナ政策があり、「14+7+7」の隔離が要求されました。まず飛行機の到着地、杭州のホテルで、14日間滞在します。そのあと、杭州に一人暮らしの自宅がなく、実家が別の都市にある場合は、実家周辺のホテルで7泊の隔離となり、最後に、家族の住む実家で7日間の在宅隔離となります。万が一感染した場合は隔離期間がまた延長されます。隔離されるホテルは選択できません、バスで運ばれた先のホテルに泊まります。私は同じ飛行機で来た日本人たちと一緒に、一泊10000円くらいのホテルに入りました。ほかの人の経験と比べると、普通のレベルの値段です。ホテルの

人はほとんど日本語が出来ません。日本の人たちはどうかな？と、少し心配しました。しかし数時間後、日本の人たちは全部WECHATグループに入り、自動翻訳機能を使い、ホテルと順調に交流し始めました。毎日の体温チェック、食事や費用に関する問題、および担当医との会話など、全部WECHATグループで行います。科学技術は偉いねと感じました。私は杭州に居場所がなく最後に寧波に行くため、杭州で滞在できません。14日間の隔離中に寧波の担当区役所から連絡が来ました。7人乗りのバスが私のために、わざわざ寧波から杭州に来て、私を寧波の隔離施設に運びました。寧波の隔離施設はホテルではなく、臨時的に作った建物です。外部から見るとコンテナみたい、すこしやばいが、内部には基本的な器具が完備されています。ここは比較的安く、一泊約4000円でした。最後の7日間は家にいるから、私にとってはもう大丈夫、隔離とは感じられません。コロナのせいでもう三年ぶりの家族と再会し、幸せでした。私の隔離の終わり際に、中国の隔離政策が変わり、「10+3」へ短縮されました。

毎日「政策が変わりそう」と言われましたが、隔離政策の故、14日間の隔離で、杭州に滞在しても、講演会を行うことは不可能になりました。この隔離が全部終わった時、もう7月に入って

いました。もし寧波から杭州に戻るなら、また7日間の隔離が要求されます。しかも中国美術学院の学生はほとんど夏休みのため帰ったので、現地で学生さんたちと交流することはできません。9月、やっと新学期が始まり、私は上海大学に入職しました。上海大学は、上海を離れた場合、一週間学校に入れない、在宅の自主隔離という規定がありました。そして中国美術学院も、入校制限がありました。特に上海はコロナ問題が激しい地域なので、多くの制限がありました。また、中国美術学院の担当者たちが別の件で忙しいなど、いろいろな問題に影響され、2023年3月26日にやっと講演日時が決まりました。ポスターができた二日後3月28日に講演会を行いました。

宣伝時間はかなり短くて、誰が来るかなと心配がありました。会場は大きくない、約15名前後の座席は満席でした。オンライン会場では、約40名がいるようでした。中央美術学院の先生や学生たちは、このテーマに興味があり、いろいろな問題を質問し、予定の時間より延長され、二時間を超えました。講演会のビデオは、今後中国美術学院の関係ウェブサイトへアップロードする予定なので、より多くの人に見られるようになると予想されます。また当日の夜、広州のおひとりの副教授から、オンラインで講演会を見た後、私の先輩を通じて連絡があり、高島北海や横山大観の関係についてお話ししました。次の日、中国芸術研究院の知り合いからも、高島北海の件が面白くて、もっと知りたいと言われました。



2. 講演会の内容

今回の講演の内容について、概要を記します。

中心的な論点は、画家であり地質学者でもある高島北海(1850年～1931年)の画論『写山要诀』(1903年)がどのように中国で受容されてきたのかであり、とりわけ中国の画家である傅抱石(1904年～1965年)の翻訳・紹介活動に焦点を当てました。彼は『写山要法』(1957年)という新タイトルをつけて中国語訳本を出版しています。

先ず中国における『写山要法』の出版は、当時の中国における社会主義リアリズムの風潮が契機となっています。1950年代の中国は、写実的な山水表現が求められていました。『写山要诀』では、地質学の知識を東洋山水画に活用するという新説が提示されており、実用的な著作です。そのため、傅抱石はおよそ二十年前に完成した訳稿をこの時点で出版しました。

次に『写山要法』の内容を検討すると、傅抱石が添削や注解を施して中国読者に受け入れやすいようにと、意識的に内容の調整を行っていた事実が判明しました。この調整においては、中国に関する事項を強化するとともに、日本に特有の要素は削除することを中心にしています。それによって、日本語版の原本の基礎をなす「地質学画論」は、中国の伝統的な絵画理論を継承している書物であるという印象を与える書物に変貌しました。

最後に高島北海の『写山要訣』は、画論ではなく、「科学」的な地質学の書として中国の読者に認識されました。それは傅抱石が紹介する際、高島北海という人物より、科学・地質学の概念を強調したことに起因すると推定されます。さらに傅抱石は中国語の地質学専門書を参考にして、画論や制作において独自の解釈を行っていたことも関係していると推測します。換言すると、傅抱石の翻訳・紹介を介することで、中国版の読者には、日本語の原本『写山要訣』は科学的な地質学書として認識されると同時に、『写山要法』は傅抱石により中国伝統画論に基づいて作られたオリジナルの著書であるというような誤解を招きました。

その結果『写山要訣』が中国で及ぼした影響力は、長い間認識されないままとなっていました。

本講演は、『写山要訣』とその中国語訳『写山要法』への翻案に潜んでいた美術史的な価

値を検討し、それが再評価に値するものであることを立証することを目的としています。

この講演会を経て、中国画家の日本留学および日本画の研究は、たくさんの中国人に注目されていると感じました。私はこれからも研究を続け、日中の文化芸術の交流を深めたいと思います。

渥美財団の資金援助について、ここで感謝いたします。